

指示会話における聞き手の行動バリエーション

上智短期大学

宮崎幸江

1. はじめに

日本語で指示を聞くという言語行動において、聞き手の年齢と聞き手と話し手の上下関係は、聞き手の行動に影響を与える（宮崎2007）。宮崎（2007）は、初対面で年齢の異なる（19～61歳）の30人の日本語母語話者女性が研究者（41歳）から指示を受ける際の聞き方をリアクティブ・トークン（Clancy et al. 1996 以下RT）を用いて分析し以下の特徴を提示した。

1. 聞き手の年齢とバーバルRTは比例、ノンバーバルRTは反比例する。
2. 2分間の指示を聞く間に使われるRTの総数は、個人の間で統計的に有意な差はない。
3. 聞き手のRTの使用はポライトネス・ストラテジーとして機能する。

本稿は同世代の親しい友人間の指示会話における、聞き手の行動を分析し宮崎(2007)の結果と比較する。親しい同世代の話し手からの指示を聞く場合、ポライトネスではなくラポートの方が重視されると推測できるが、そのことが聞き手の行動にどう表れるかをRTの頻度・種類について分析し、上下関係と親疎の違いによるコンテキスト（Tannen 1993）を用いてバリエーションの説明を試みる。

2. 調査方法・被験者

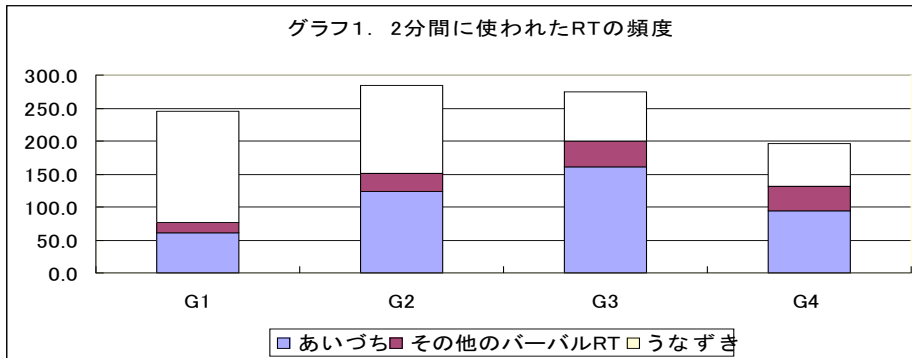
参加者は関東出身の日本語母語話者学生5名（19～20歳、女性）で、クラスメート同士である。話し手も同じくクラスメートで、教員からの指示を一人ひとりに伝達する会話（各2分）を録画した。結果を宮崎（2007）の初対面指示会話【聞き手G1（19～23歳）、G2

（28～40歳）、G3（44～61歳）各5名；話し手（41歳、初対面研究者）と比較するため、本稿の聞き手をグループ4【聞き手G4（19～20歳）各5名；話し手（20歳クラスメート）】とした。聞き手の行動の定義は、宮崎(2007)の定義に従い、バーバルRT(あいづち等)とノンバーバルRT(あいづちを伴わないうなずき)に分類した。

3. 結果

分析の結果、バーバルRTとノンバーバルRTの2分当たりの総数は、G1:245, G2:284, G3:274, G4:197となり、G4は初対面の場合と比べて頻度の総数は低く、同世代G1の80%である。一方バーバルRTの割合は、G1:31%, G2:53%, G3:73%, G4:77%と、G4は全グループ中最も高く、同世代G1との差は顕著である。初対面のG1, G2, G3で、最も多く使われたのはあいづちで、あいづち以外（繰り返し・先取り・コメント等）のバーバルRTの使用頻度はG1 < G2 < G3の順であったのに対し、G4はあいづち以外のバーバルRTが最も高いG3の約1.3倍使用されている（グラフ1）。つまり、親しい同世代間での指示会話における聞き手の行動は初対面の場合に比べ、RTの総数

）。つまり、親しい同世代間での指示会話における聞き手の行動は初対面の場合に比べ、RTの総数が減少、ノンバーバルの割合も減少するが、バーバルは増加、特にバーバルRTの中でもあいづち以外の実質的な発話（杉戸1989）を含むRTの比率が上がるということが明らかになった。



4. 考察

宮崎（2007）の提示した親疎と上下関係から成る2つのコンテキストに本稿の実験結果を加えると、日本語の指示会話における聞き手の行動は以下のような特徴を持つと言える。

疎+上下関係大（G1）：うなずき>バーバルRT（あいづち多、あいづち以外のRT少）

疎+上下関係小（G2/G3）：うなずき<バーバルRT（あいづち多、あいづち以外のRT増）

親+上下関係なし（G4）：うなずき<バーバルRT（あいづち多、あいづち以外のRT増）

同じ大学生世代が、初対面・目上の話し手から指示を聞く場合（G1）と、親しい同世代（G4）から指示を聞く場合、言語か非言語かという選択が最も大きいことがわかる。また、上下関係がない(小さい)場合、親しさの度合いがバーバルRTの種類（あいづちかその他のRTか）に影響することも判った。今後は親しく上下関係のあるコンテキストで聞き手がどのような行動をとるか追求していきたい。

付記

本研究は、平成19年度科学研究費補助による「日本語における聞き手の言語・非言語行動のバリエーション研究」（若手スタートアップ、課題研究番号 19820057）の研究成果の一部である。

参考文献

- 杉戸清樹(1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち-言語行動における非言語的表現-」『日本語教育』67, pp.48-59
- 宮崎幸江（2007）「日本人女性の聞き手としての行動—親疎と上下関係によるバリエーション」『言語学と日本語教育V』pp.157-174 くろしお出版
- Clancy, P. M, S. A. Thompson, R. Suzuki, and H. Tao (1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of pragmatics* 26. 355-387

and Mandarin. *Journal of pragmatics* 26. 355-387

Miyazaki, S. (2007). Japanese women's listening behavior in face-to-face conversation: The use of reactive tokens and nods. Hituji Shobo Publisher: Tokyo.

Tannen, D. (1993) The relativity of linguistic strategies: Rethinking power and solidarity in gender and dominance. In D. Tannen (ed.). *Gender and conversational interaction*, 165-188. Oxford: Oxford University Press.

用語リスト

リアクティブ・トークン : Clancy et al. (1996)が用いた聞き手の行動を表す用語。元の定義は “a short utterance produced by an interlocutor who is playing a listener's role during the other interlocutor's speaking turn (Clancy et al. 1996: 136)”だが、本稿ではうなずきを含めて使用。